

## 現地からのお便り

今回は、インドネシアの固有種であるテナガザルのジャワギボンについてお話します。ジャワギボンは熱帯雨林に住み、果実や葉、昆虫などを食べます。1夫1妻で、最大4頭の子供で家族をつくります。

IUCN(国際自然保護連合)が作成しているレッドリストでは、絶滅危惧種に指定されています。残された熱帯雨林への人間の侵入などにより、ジャワギボンが住む森の98%がすでに破壊されていると考えられ、野生に残された個体は4,000頭を下回るとみられています。

国立公園内にあるジャワギボン・センター(JGC)では、ジャワギボンを保護し、万全の状態に適切な生息環境に戻すため、リハビリを行っています。

## ジャワギボンの保護とリハビリテーション



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

保護されたジャワギボンは、検疫後に野外のケージの中へ移動します。人間に飼育されていたケースが多いため、はじめは野生のギボンとは異なった振る舞いをします。センターでは、どう動いたらいいのか、他のギボンとの交流のしかた、食べ物の見つけかたや実際に自然の果物をとってくるまでをリハビリしていきます。

リハビリで難しい点は、つがいにさせることです。ギボンは、家族で行動する動物です。ギボンをリリースする際には、つがいにしておかなければなりません。そこで、オスとメスのギボンを1頭ずつ同じケージに入れます。もしお互いに気に入ればペアになることができますが、気に入らなければ別のギボンを引き合わせなくてはなりません。

2009年10月、ギボンのペア1組をグヌングデ・パングランゴ国立公園の自然環境に戻すことに成功しました。現在は、2~18歳の28頭ペア6組がリハビリを受けています。

リハビリには、忍耐力と高い注意力と慎重さが必要です。絶滅危惧種であり、ジャワの固有種であるだけでなく、とても繊細な動物だからです。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

## 村の子どもたちの生活



(c) Conservation International, Photo by Anton Ariö

村の子どもたちの生活は、都会の子どもたちとはまったく違います。ほとんどの子どもたちは学校に行っていますが、学校まで2kmも歩かなければなりません。車もバスも無く、自転車すらありません。でもとても幸せそうです。親の経済的な理由で学校に通えない子どももいるからです。放課後は、植林地の周辺で遊んだり、川で泳いだりするのが日課です。

画像および文章の無断転用はご遠慮下さい。